慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	香港シティー・ホール博物舘との交換考古資料について
Sub Title	On archaeological speciments from City Hall Museum, HonKong
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.2 (1972. 1) ,p.87(223)- 91b(227b)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

香港シティー・ホール博物館との交換考古資料について

近森　正

本塾文学部考古学・民族学研究室は、一九六八年香港のシティー・ホール博物館との間に考古学資料の交換をおこない、香港島嶼地域から発見された土器片一八点の寄贈をうけた。それらは石器時代から初期金属器時代にわたる各時期の標本一組である。はじめに、われわれの資料交換の申し出を受け入れ、その労をとられた香港シティー・ホール博物館の James Watt 氏に深謝の意を表する次第である。

標本一覧（番号は図版に対応する）

初期幾何印文陶期（中・後期新石器時代）

(1)—(2)　縄席文土器　銅鼓島 Tung Ku Island

(3)　幾何印文軟陶　銅鼓島

幾何印文陶期（後期新石器時代）

(4)　粗紅陶　茅達湾 Mau Tat Wan, 南丫島 Lamma Island

(5)—(7)　幾何印文陶　万角咀 Man Kok Tsui, 大嶼山 Lantao Island

幾何印文硬陶期（青銅器時代）

(8)　ダブルF文（瓔文）　榕樹湾 Yung Shu Wan, 南丫島 Lamma Island

(9)　ダブルF文（瓔文）　万角咀 Man Kok Tsui, 大嶼山 Lantao Island

(10)—(12)　網文　万角咀、大嶼山

(13)(a)—(b)　菱文　榕樹湾 Yung Shu Wan, 南丫島 Lamma Island

(14)　結合文　榕樹湾、南丫島

(15)　菱文　万角咀 Man Kok Tsui, 大嶼山 Lantao Island

(16)　結合文　万角咀、大嶼山

(17)　緑釉陶豆残片　万角咀、大嶼山

編年的枠組　香港地域の先史時代編年の研究は、遺物包含層の多くが島嶼海岸の軟弱な砂質土壌によって形成されていることが層位学的観察を困難なものにしてきた。しかしながら、今まで石

器と軟質の土器すなわち軟陶を含むグループと、石器に加えて青銅器と硬質の土器すなわち硬陶を伴うグループの二つの文化相が存在することが知られ、後者の文化相が前者の文化相のあとから登場することが推定されている。香港地域の考古学研究は、一九二〇年代に入ってヘンリー C. M. Heanley が九竜地区で土器と石器を発見したのにはじまるといわれているが、本格的には一九三二年、イギリスのジェスイット教会のフィン師D. J. Finn によって、南丫島（舶遼州）Lamma Island の遺跡が発掘されてからのことである。（フィン師の業績については、すでにはやく松本信広名誉教授によって本誌上に紹介され、この地方の考古学研究の重要性が説かれている。）[1] 南丫島は香港島の西南約3キロにある島で、フィン師の発掘した遺跡は大湾に面した砂丘上にあり、出土した遺物は有肩、有段石斧、石製装飾品などとともに青銅製の小型利器をともない、土器は縄蓆文や各種の印文土器、とりわけフィン師によってダブル文と呼ばれた印文陶は、広東からインドシナにかけて分布をもつ特徴的なものであった。フィン師は、このダブルF文を中国の商、周代の青銅器の装飾モチーフと比較し、さらに青銅利器の型式研究にもとづいて、前五〇〇年ごろ中国の青銅器文化の影響が、この地方の新石器文化の中に侵透したことを推測した。そしてダブルF文によって代表されるこの時期を、この地域における先史時代の最後の時期においたのである。[2]

フィン師についで香港で研究を続けたイタリア人神父マリオーニ R. Maglioni は海東省沿岸の海豊地域における広範な表面採集の成果にもとづいて新石器時代を三期に区分した。彼によれば、それらの各時期は、代表的な遺跡によって、Son, Sak, Pat（遺跡地名 Sha-keng, San-chiao Wei, Pa-tsai-yuan の略符）と呼ばれ、Sak と Pat の差異はわずかであるが、Son 遺跡の文化相が、他の二つより早くあらわれることを指摘した。[3]

第二次大戦後、一九五六年に香港大学に考古学研究チームが成立してから、次第に組織的な研究調査がつみかさねられ、一九五八年以後、政府の補助をうけて継続調査された万角咀 Man Kok Tsui 遺跡の発掘は最も規模の大きいものであった。この遺跡は香港島の西にある大嶼山 Lan Tau Island の南東岸に位置し、出土した遺物は有段、有肩の方形石斧、幾何印文陶とならんで釣針、柳葉形ナイフなどの青銅器がある。幾何印文陶は軟陶と硬陶の両者を含むが、発掘の結果、明確な印文軟陶の層位を確認できなかった。遺跡全体としては、印文硬陶の文化相を示めしていると考えられる。[4]

編年の上限　香港地域における文化相は、今のところ縄蓆文土器をともなう新石器時代中、後期までしかさかのぼらない。かってスコフィールド W. Schofield やフィン師によって、Proto-neolith あるいは epimiolith と呼ばれた各種の打製剝片石器は再検討を加えるに価する。近年、広東省の翁源県青塘や南海県西樵山などから発見されているインドシナのホアビンーバクソン系の中石器ないし初期新石器文化のひろがりが、[5] この地域に及んでいなかったかどうかは、精査の余地を残している。香港の縄蓆文

土器がそれら初期新石器文化にあらわれる縄席文土器と、どのようなつながりをもつかは興味ある問題である。

初期幾何印文陶期　初期幾何印文陶の明確な文化層は大嶼山の石壁遺跡において、スコフィールドによって発見されている。[6] 土器は粗い軟質のもので、単純な幾何学文が施され、器面にスリップを施したものがある。石器には方角斧の他に、石戈や石槍、玦状石輪などがあり、中国青銅器文化の影響があらわれているとみられている。広東省においては、饒宗頤が韓江流域の調査によって、華南沿岸の後期新石器文化に属する印文軟陶の時期に白陶や、石器の型式に示めされる商代文化の影響を指摘している。[7]

ところでエール大学の張光直は、華南の新石器時代文化の源流を華北からひろがった竜山文化の拡大発展にもとめる仮説を発表しているが、[8] 一九六八年一〇月に発掘がおこなわれた銅鼓島 Tung Ku Island 遺跡の示すめ文化相は、印文軟陶と竜山文化の関係を示唆している。土器は標本(1)―(2)にみられる粗い縄席文土器や、標本(3)に示めしたような肌目の細いスリップを施した幾何印文軟陶を出土しているが、それらに伴って紅色あるいは灰色の泥質軟陶が、かなり発見されたことは注目される。[9] 江蘇省南部では、印文陶に先行する泥質軟陶が竜山文化を受け入れ、商代青銅器文化の影響によって印文陶を生みだしたことが確かめられている。銅鼓島遺跡において、そうした過程が確認されるかどうかは、今後の研究に待たねばならぬが、この遺跡がマリオーニの海豊 Son 遺跡の土器に類似したものを含みつゝ、他の遺跡に比べて最も古い様相を示めしていることは間違いない。そうしたことから全体として、銅鼓島遺跡が竜山文化の伝統と関係をもちながら、幾何印文陶の初期のステージに属するものと推測されるのである。

幾何印文硬陶期　硬陶の多くは幾何学的な文様が器面に刻まれているが、総じて夔文、格子文、菱文などは軟陶よりも硬陶に一般的である。それらのうち、フィン師によってダブルF文と名づけられ、後に中国の考古学者によって夔文と呼ばれるようになった特徴的な文様パターンは、(標本(8)・(9)) あきらかに安徽省南部の屯溪などにみられる西周後半期の一群の青銅器文様に、[10] その起源をたどることができるが、器形においても屯溪の出土品にみられる釉のかゝった豆などは、香港や広東における印文硬陶の典型的な原型をなしていると考えられる。

一九六二年に広東省の清遠の東周代墓葬遺跡から出土した青銅鐘、剣、矛、鎗などの青銅器は、夔文すなわちダブルF文を含む印文硬陶を共伴している。[11] それらは楚の青銅器文化との強い結びつきを示めしていると同時に、雲南の石寨山遺跡にみられるドンソン的要素も表現している。香港の印文硬陶文化は珠江をたどって雲南、広西地方、また海岸線に沿ってヴェトナムのドンソン文化と少なからぬ関連を有していたと思われる。

なお、近年調査されている大嶼山の石壁をはじめ各地で発見されている石彫遺構のいくつかは印文硬陶との関連が考えられている。

標本　(1)(2)　銅鼓島遺跡より出土した縄席文を施した土器で、1は黒褐色、2は明褐色を呈する。ともに胎土に砂粒を混じ、叩打法による堅密な仕上げを示めしている。縄席文は重複部分をもち、撚り糸を巻きつけた拍子で器面をたゝき施文されたものである。

(3)　銅鼓島から出土した幾何学的な格子文をもつ印文軟陶。細密な粘土を用いた泥質の土器で、器面は灰色、内側は明褐色を呈し、非常に脆弱である。

(4)　南Y島茅達湾出土の粗紅陶。赤褐色で厚さ一三ミリの厚手の大形土器の口辺部分である。無文で胎土に粗い砂粒を含む。

(5)(6)(7)　5と6は杉綾文。7は籠目文を印刻した幾何印文陶で、すべて大嶼山、万角咀遺跡出土。胎土に細い砂粒を混入する。

(8)(9)　典型的な夔文いわゆるダブルF文土器。Fの字をふたつ、たがいちがいに結合した形を連続して施文したパターンである。広東省、香港地方に特徴的な硬陶の文様である。質は細密で、焼成温度はきわめて高く堅くしまっている。8は南Y島、榕樹湾遺跡出土で、明るい灰色。9は大嶼山、万角咀遺跡出土で、赤褐色を呈する。

(10)(11)(12)　すべて大嶼山、万角咀出土。網目状の方格文を全面に施した硬陶。細密な粘土をきわめて硬く焼きあげている。10は赤褐色、11は灰色、12は胴部と口縁部をつなぐ頸部分で、斜方格文を刻んだ後に、鋭い平行沈線を横位に走らせてある。灰色。

(13)a－b(15)　菱形文を全面に施した硬陶。13a、bは黒褐色。15は白味をおびた明褐色で、胴部に菱形文を刻み、口縁部は無文である。

(14)　菱形文と斜方格文を上下に複合して、施文した硬陶で灰色を呈する。南Y島、榕樹湾出土。

(16)　夔文と斜方格文を上下に結合した複合文をもつ硬陶。

(17)　比較的厚い土器の破片。いわゆる陶豆の器形をもつものとみられ、内面全体と表面一部に緑釉がかゝっている。大嶼山、万角咀出土。(Sep, 1971)

註

(1)　松本信広　香港の発掘に就いて「史学」一二―四　昭和八年

松本信広　再び香港の発掘に就いて「史学」一三―一　昭和九年

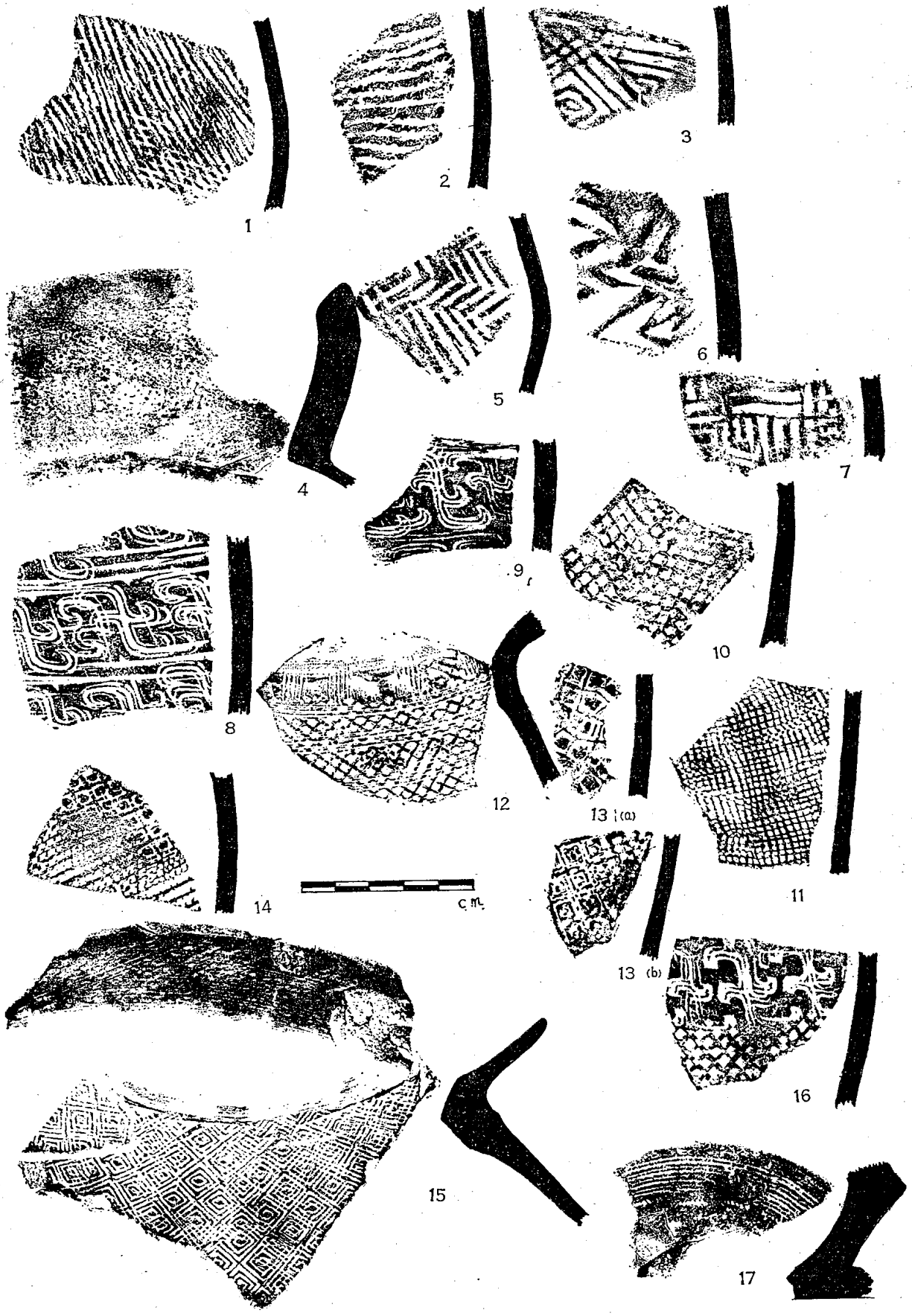
松本信広　香港舶遼州の発掘に就いて――フィン師を悼む――「史学」一七―一　昭和一三年

(2)　Finn, D.J. Archaeological Finds on Lamma Island near Hongkong. edited by T.F. Ryan, Hong Kong, 1958.

(3)　Magloni, R. Archaeological Finds in Hoifong, *The Hong Kong Natualist* 8, 1938. Archaeology in South China, *Journal of East Asiatic Studies*, No. 2, 1952.

(4)　Davis, S.G. & Tregear, M. Man Kok Tsui, Archaeological Site 30, Lantau Island, Hong Kong. *Asian Perspectives*, Vol. 4, 1961.

(5) 広東省博物館　広東南海西樵山出土的石器。考古学報一九五九年第四期、一九五九
(6) Schofield, W. The Proto-Historic Site of the Hong Kong Culture at Shek Pek, Lantau, Hong Kong. *Proceedings of the Third Congress of Prehistorians of the Far East*. Singapore, 1940.
(7) 饒宗頤　韓江流域史前遺址及其文化。香港一九五〇
(8) Chang, K. C. Prehistoric and Early Hisoric Culture Horizons and Traditions in South China. *Current Anthroprogy* 5, 1964.
(9) Watt, J. C. Y. Archaeological Finds in Hong Kong and Their Cultural Connections. *Journal of the Hong Kong Archaeological Sociey*, Vol. 1, 1968.
(10) 安徽省文化局　安徽屯溪西周墓葬発掘報告。考古学報　一九五九年　第四期　一九五九
(11) 広東省文物管理委員会　広東清遠発現周代青銅器。考古一九六三—二　一九六三


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13 (a)
13 (b)
14
cm
15
16
17